

日本英学史学会中国・四国支部

ニューズレター

No.94

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

「明ける」をめぐって —年頭のご挨拶—

竹中龍範

明けましておめでとうございます。本年が皆さまにとりまして実り多い一年となることを祈念申し上げますとともに、支部の発展のために一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

本年は、明治以来の一世一元の制が改められて在位中の退位・改元となることが予定されております。新元号については、本稿執筆の時点(2018.12.10)では未だ発表されておりませんが、巷間これをいろいろと予測する向きもあるようです。この話題に係り、筆者にはある思い出があります。

今から16、7年前のことですが、某誌から英語辞書史研究書の書評を依頼された時のことです。初校が届いた翌々日にたまたま上京の予定があったので、直接この校正を編集部を持参したのですが、そこで筆者が用いた「明治が明けて」という表現が誤りではないかと指摘を受けました。文脈上、明治になってという意味であろうが、「明治が明ける」という言い方では明治が終わるという意味なのでおかしいとの指摘でした。これに対し筆者は、始まるという意味で「明治が明ける」というのは普通の言い方でしょうと反論しましたが、編集部の3名ともが終わるという意見で、かつ、編集部が常用している某社の国語辞典でも「始まる」という定義はしていないと返されましたので、多勢に無勢、止むなく、字数を変えずにということで、「明治になって」というつまらない表現に改めました。

その後、これについていろいろと考えてみましたが、なぜあの時に、「新年明けましておめでとう」と言うではないか、「旧年明けましておめでとう」など聞いたことがないと反論しなかったのかと思ったりもしました。そのうちに、「明ける」ということは明るくなるということで、プラス・イメージのものが主語に立つ場合には「始まる」、マイナス・イメージの語を主語に立てる場合には「終わる」ということになるのではないか、こう考えれば、「喪が明ける」や「梅雨が明ける」ではその期間が終わる、新年の場合にはこれが始まるという意味になるのであって、それからすると、徳川300年にわたる封建の世が明けて(=終わって)、日本が近代国家としての道を歩み始める明治の時代が始まったのだから、「明治が明ける」で問題はない、国語辞典が誤っているとの結論に達しました。

これが解決したのは、それから1年近くたった2002年の年末、大学の書籍部をのぞくと新しい国語辞典が並んでいたのも、これを手に取り「明ける」をひいてみた時のことです。そこには語法注記があり、『夜が一/朝が一』『旧年が一/新年が一』のように、古いものと新しいものの両方を主語にとる」と記されておりました。その分析するところは筆者のプラス/マイナス・イメージとは異なっていて、これでは主・述語間の共起関係の分析が不十分と考えましたが、それでも、このT社国語辞典をその場で求めたことは言うまでもありません。

(日本英学史学会中国・四国支部長)

<エッセイ>

大村益次郎没後 150 年

—大村の学才が新しい国を作るエンジンとなった—

上 杉 進

師は大村を作り、大村は新しい国の有り様を作った。薫陶を受けた師のプロフィール：

- ① 梅田幽斎（1809－1870）江戸生まれ 師は坪井信道 蘭方を学ぶ 文久元年（1861）好生堂ご用達 長州藩の蘭学教授から侍医となる 蘭学と蘭方を教授 咸宜園を薦める
- ② 広瀬淡窓（1782－1856）日田の咸宜園は三奪法により無級 - 19 階級まであり能力別 敬天を重んじ実証的折衷学派 大村は漢籍を通して言語の語順の妙を自覚したか？
- ③ 緒方洪庵（1810－1863）師は坪井信道 大坂に適塾を創設 大村の心酔する師
- ④ ヘボン（1815－1911）安政 6 年（1859）来日 宣教師、医師 明治学院初代総理 文久 2 年（1862）居留地に施療所を新築 幕府の依頼で大村を含む 9 名の青年を教授した

大村の学力はヘボンが *Spirit of Japan*（米国聖公会の雑誌）の中で証明：彼らは二次方程式を含む代数や、平面及び球面三角法などもよく理解していた。この方面の学習ではこれらの日本人青年を負かすアメリカの大学生はほとんどいないであろう。ヘボンは蔵六を親切に指導したので、これに応えて江戸から神奈川まで一年半、馬で通った。その努力の結果英語は自由に操れるようになった。また、幕府の講武所教授のとき行った兵学書の翻訳、講義は、当時の最高水準のものであると同僚の原田敬策は彼の技量を称賛している。

益次郎は上述の恩師から授かった学才を駆使して宇和島藩（村田蔵六と改名）、長州藩（大村益次郎と改名）両藩で八面六臂の活躍をした。当時蘭学者は多数いるが、設計図を見ただけで実物の船の雛形が作れるテクノクラートは大村を除き皆無であろう。長州に出仕してから討幕のエンジンとして活躍。まず博習堂の原書第一主義を排し、翻訳書による学習を基本とした。レベルを下げると市民層の希望者が増加、この市民軍を幕軍の戦いのプロに勝利するために、軍事教育の強化を図る：普門寺塾、三兵塾で戦略・戦術さらに銃器の徹底的訓練を行う。官軍の軍服をデザインした‘火吹き達磨’本人は浴衣姿で悠々と戦場に行き、計画通り勝利する。敵方を包囲しても一隅に逃げ場を作っておく。将兵を失わない、無駄な弾丸を撃たない主義。驚くべきことは新政府が成立したとき 10 年後の西南戦争を予測し、武器庫、火薬庫を大阪に移す準備をしたことである。もし大村が存命ならば、現在文科省の唱えている英語教育の改革の 10 年後の姿を透視して欲しいものである。

大村は廷臣となり、政府直属の軍隊を作る構想であったが、反対派に襲撃されて傷つく。命は取り留めたが、のち敗血症で落命。ボードウィンが手術した左大腿部は彼の生前の希望通り、敬慕する洪庵の墓の隣に埋葬される。大村が指導したシーボルトの娘、女医第 1 号楠本イネが彼を看取る。木戸は「悲しみ極まり涙下らず、茫然氣を失う如し」と記す。

詞はその人の人生。「君のため捨つる命は惜しからでただ思はるる国の行末」一辞世

（英語教育を語る会代表）

平成 30 年度 第 2 回 (通算 79 回) 研究例会報告



県立広島大学三原キャンパス 4102 会議室にて

2018 年 12 月 8 日 (土), 県立広島大学三原キャンパス (広島県三原市) において, 本年度第 2 回 (通算第 79 回) 研究例会が開催されました。今回の研究例会では, 田邊達雄先生による三原洋学所についてのご講話, 山田宗八先生による宇田川榕菴の『印版法術』についてのご発表が行われました。参加者は 18 名でした。

日 時: 2018 年 12 月 8 日 (土) 13:30 受付開始
会 場: 県立広島大学三原キャンパス (4 号館 4102 会議室)
〒723-0053 広島県三原市学園町 1-1
参加費: 会員, 非会員とも無料

<< 研究例会プログラム >>

開会行事 (14:00~14:05) 支部長挨拶

講 話 (14:05~15:15)

「三原洋学所あれこれ」

田邊 達雄 (呉工業高等専門学校名誉教授・元県立広島大学)

研究発表 (15:30~16:40)

『印版法術』英語受容の手引書」

山田 宗八 (山田共学道場)

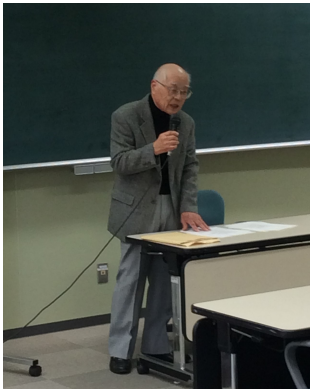
閉会行事 (16:45~17:00) 副支部長挨拶, 写真撮影

忘年懇親会 (18:00~)

くいもの屋「わん」三原駅前店にて

講話

「三原洋学所あれこれ」



田邊 達雄 (呉工業高等専門学校名誉教授・元県立広島大学)

田邊先生は、呉工業高等専門学校、続いて県立広島大学三原キャンパスで長年英語を講じられ、ご定年後は地元三原の郷土史を研究していらっしゃいます。今回のご講話では、明治初年のわずかな期間、糸崎松浜港に置かれた三原洋学所について、開設にいたる背景や、その影響についてお話しく下さいました。英国人ブラックモールは英語と英式練兵を教授したとのこと、いかに英学が軍備と密接にかかわっていたかを思わせます。三原が「広島英学の起り」に果たした役割の大きさを知ることができ、地域の英学を研究するさらなる意欲を掻き立てられるお話でした。まことにありがとうございました。(馬本 勉 記)

【参加者の感想】

◆三原洋学所についてのお話を伺い、大いに関心を覚えました。短命に終わったということもあり、資料の面での制約が大きいと思いますが、引き続き調査をお進めいただきて続報をご発表いただく機会のあることを期待しております。洋学所の教員組織に加え、ここに学んだ生徒の回想や自伝等が発掘できれば、そこからその教授内容に関する情報が得られようかと思われ、広島本藩から出張伝習を受けた生徒のほか、「三原住土族等」にも調査範囲を広げていただき、一つでも二つでも欠けたピースを補っていただければとお願いいたします。また、ぜひ本支部にご入会いただき、情報収集の輪を広げていただき、互いに情報交換の機会を増やせればと思います。

<Dragon>

◆三原の歴史や洋学所が三原ではなく糸崎に開設された理由などを教えていただき大変勉強になりました。また、三原洋学所の英語教師兼英式練兵の教授として迎えられた John Blackmore に興味を持ちました。その人物像について今後の解明に期待しております。

<E. Woodhouse>

◆ブラックモールについて：英語教師、英式練兵の教授とあるから、横浜開港資料館で往時の ①新聞で探す ②外国人の人名が集めてある書類をくつてみる ③教会の本国への報告 (Anglican Church) を調べる (例) アメリカであるが、ヘボン博士は大村益次郎の才能をヘボンが書き送っていた。④Freemason であれば世界中の組織があるから利用できるのでは ⑤日本で死んでいるなら神戸外人墓地等—整理されているので PC で検索できる。ヒットすれば幸甚。

<東洋美人>

◆洋学の前に歴史についてお話くださったことはとても興味深く、小早川隆景が毛利元就の3男であつ

たと伺い三原に親近感を感じました。三原の洋学といえ「ブラックモール兄弟」、寺田芳徳先生を思い出しました。やはり、その土地で聞くのはいいですね。少ない資料の中から英学に関する文献をまとめるのは大変だったと思います。ありがとうございました。

<Rainbow>

◆三原での例会らしいお話で大変興味深かったです。Blackmore の研究の発展を楽しみにしています。

<YH>

◆糸崎に明治初年に山陽地方で最初の英語の学校が開校したことを初めて知ることができました。Mihara Archives of Western Learning について貴重なお話、大変興味深く拝聴させて頂きました。ありがとうございました。感謝いたします。<宗八>
◆私の故郷である三原に、わずか数か月とはいえ、「洋学所」が存在していたことに大変驚きましたし、興味をもちました。Web で検索してみると、地元の糸崎小学校にはその記念碑が設置されているようですから、一定の認知度はあるのかも知れませんが、まだまだ分からないことだらけのようで、今後の更なる研究が待たれますね。田邊先生から

「三原には認知されていない歴史的魅力が多い」と伺いましたので、私自身も探究してみたいと思いました。

<Y. Dohana>

◆例会の前に糸崎の港まで足を延ばしてみたのですが、松浜の辺りには潮待ち・風待ちの港と呼ばれるにふさわしい佇まいの建物が残っており、貿易港として栄えた往時を偲ばせるよすがとなっていました。先生のお話によれば、三原洋学所の詳細については依然として不明のところが多いようですが、糸崎がその開設の地としてふさわしかったことが体感できたような気もして、立体的にお話をうかがうことができたように思います。

<Wajo>

研究発表

『印版法術』英語受容の手引書

山田 宗八 (山田共学道場)



宇田川榕菴は「化学」を「chemist」、「コーヒー」を「珈琲」等現代に言葉を残しただけではなく、自然科学、西洋音楽や民族文化などに関心を持ち、江戸時代のマルチ学者ともよばれている。榕菴が残した『印版法術』の中で、「英字ハ蘭字ト同シ其呼法韻音ハ蘭ト同カラズ」と説明している。榕菴は「*a e i o u*」ハ韻母ナリ、*J V*ハ副韻ナリ」と解説している。言語学の一領域、音素を対象にして、その種類、音声形式(Phonetic form)、特徴、結合上の規則性(logical form)、韻律など「音韻論」にも精通していたと思われる。『印版法術』の中で「舍密法ニ基キタル印版ノ法術」とあるようにオランダ語と英語の類似点を解説している。その歴史的意義を探った。

【参加者の感想】

◆宇田川榕菴『印版法術』という貴重な資料を得られてのご発表で、ぜひ津山洋学資料館の関係者とともに本資料の全貌を明らかにしていただき、その分析の結果をおまとめいただければと願っております。この『印版法術』は『洋學史事典』にも立項されておらず、同事典「宇田川榕菴」の項にも言及されてはいないようですので、ぜひ、わが支部紀要にご発表下さい。その際に、本資料が、その内容の点から見て、「印刷法術」という表題の下にそれとの関連において「榕菴随筆」と題する英語の音韻・正書法の概説を併せ論じているのか、あるいは、両稿本をたまたま合冊本に綴じただけのものであるのかも検討いただきたいと思います。本稿本の書き題簽が榕菴の手になるものか、あるいは別人—例えば、これに蔵印を捺している関場不二彦—によるものかの分析も求められますが、十分な証左に基づいた分析を行っていただき、本資料を榕菴の業績中に確固と位置づけていただけることを期待いたします。

<Dragon>

◆宇田川榕菴の『印版法術』という大変貴重な資料を元にしてのご発表を興味深く拝聴いたしました。さらなる解明を期待しております。ところで、1つ疑問があります。ご発表原稿の3頁から4頁に3つの英文の引用があります。英単語それぞれにカタカナでルビが付されているので、『印版法術』からの引用と思われるのですが、配布された同書のコピーには見当たりませんでした。この間の事情をご教示いただければ幸いです。

<E. Woodhouse>

◆プリント「お転婆」多謝。ヘボンの辞書、日葡辞典を調べてみます。和蘭語の手ほどきも感謝。津山

藩の蘭学の系譜図を見て、坪井信道を(毛利敬親公の侍医)介して長州とつながっているのが分かり、親近感が大いにわく。

<東洋美人>

◆『印版法術』の後半の英語の発音の解説はかなり専門的でびっくりしました。これがいつ書かれたのか、誰が使用したのか等が明らかになれば、英学史上の大発見につながるワクワク感を感じました。

<YH>

◆中期英語と現代英語と独語、蘭語の発音比較の表等、歴史だけでなく音声学の話としても興味深く拝聴しました。そしてそれを美作洋学者の一人、宇田川榕菴が解説していたというのも驚きです。豪華な資料をどっさりありがとうございました。

<Rainbow>

◆オランダ語と英語の音声的類似点について、1820年代頃に記述されていた日本人の存在を初めて知りました。宇田川榕菴が初めて英語の生の発音を聞いたのは、おそらく1822年来航したイギリス船を訪れた時とようですが、初めて聞いた時の彼の驚きは如何ばかりであったか想像を掻き立てられます。もしかしたら既に分析的に聞いていたかも知れませんね。

<Y. Dohana>

◆久しぶりにお元気なお姿を拝見し、たいへんうれしく思います。今回のご発表はまことに興味深い資料に基づく内容で、津山という土地の奥深さを再認識しています。お忙しいことと思いますが、ぜひとも続編・続々編をご発表いただきたく心待ちにしております。質疑応答の過程でフロアからさまざまな知識や解釈が示され、わからなかったことが次々にわかってくることにも知的な興奮を覚えました。

<Wajo>

【研究例会全体について】

◆久しぶりの出席者数を得ての研究例会となり、何よりでした。三原を会場としたことも初めてのことであり、このように、各年度第2回の研究例会は広島市以外の中国・四国地方各地にてという方針の下、新たな開催地の開拓につなげ、それを機にその地で支部会員確保につなげることができればと願っております。

<Dragon>

◆県立広島大学三原キャンパスを訪れるのは初めてでしたが、眺めのいい高台にあり、建物も瀟洒で、大変羨ましく思いました。研究例会の参加者も予想

していたよりも多く、発表内容は興味深く、質疑応答も活発で、大変充実したものになったと思います。

<E. Woodhouse>

◆初めての三原開催とのことでしたが、私の故郷ということもあり、興味津々で参加しました。会場の県立広島大学もアクセスしやすかったです。内容についても、開催地にちなんだ貴重な講話もあり、さらに数年前、私は出席できなかった津山例会で発表された山田先生のご研究の一端に初めて触れることが叶い、参加した甲斐がありました。

<Y. Dohana>

中国・四国支部ニュース

》『英學史論叢』第22号 原稿募集

前号でもお知らせしました通り、中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第22号の原稿を募集しています(2019年5月発行予定)。

研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・投稿に際しては、ニューズレターNo.93ならびに支部ウェブサイトに掲載の「執筆要領」、「標準書式」に従ってください。

・研究論考・研究ノートの原稿提出締切は、**2019年2月20日**(消印有効)です。正副計3部を事務局まで郵送してください。正本1部にのみ著者名を明記し、副本2部には著者名を伏せてください。

・査読結果を3月末までにお知らせします。掲載決定後の修正原稿は4月末までにご提出ください。

・標準書式に則ったファイル(テンプレート)をご希望の方は、事務局までお知らせください。

・英学史随想、書評等の原稿につきましては、3月末日までに1部を事務局までお送りください。

》平成30年度第2回役員会

2018年12月8日(土)、三原例会に先立って開催された役員会において、今年度の活動報告および平成31年度活動計画について協議しました(出席者9名)。以下、来年度の行事予定です。

・支部総会・第1回研究例会

2019年5月25日(土) 広島市にて開催予定

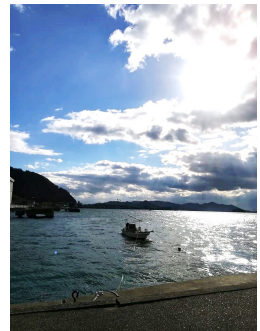
・第2回研究例会

2019年12月14日(土) 津山市にて開催予定

》2019年度第1回研究例会 発表者募集

2019年5月25日(土)に安田女子大学(広島市安佐南区安東)において開催される研究例会での発表者を募集します。希望する会員は、(1)発表題目、(2)発表者氏名(所属)、(3)発表概要(200字程度)、(4)使用予定機器、以上4点を明記の上、事務局までお申込みください。(申し込み受付期間は、3月22日(金)まで)

広島英学史の周辺(60)▼毎年冬に訪れる中国四国地方の町々は、そのたびに新たな思い出の地となります。三原での例会は、「研究のフィールド」に思いを馳せる機会となりました。▼ご講話をいただいた田邊先生の三原、研究発表をしてくださった山田先生の津山。それぞれの地に洋学・英学が起り、その歴史を語り継ぐ研究者があり、人が集う。これが私たちの中国・四国支部の原点なのだと改めて感じました。▼私にとっての庄原が、広島が、そうした「我がフィールド」と呼べるよう、さらに研究を積み重ねていきたいと思っています。(馬)



糸崎にて (Wajo)

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.94

2019年1月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中 龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.94 January 31, 2019